



《シリーズ ケアをひらく》 漢方水先案内 医学の東へ

津田 篤太郎 著

A5 頁238 2015年

本体2,000円+税

ISBN978-4-260-02124-1 医学書院刊

評者 舩本 真理子

武蔵野赤十字病院・腫瘍内科

まず、この本は題名通り「水先案内」です。通読しても、残念ながら手っ取り早く漢方が使いこなせるようにはなりません。しかし読後は、漢方に対するイメージの変化と、新鮮な発見があると思います。

できれば、「漢方ってちょっと邪道だ!」などと思っている理屈っぽい若人にこそ、読んでほしい本だと感じました。理屈で応えてくれる本ですので。

何をやってもダメなとき

私たち日本の医療者が学校で習ってきた知識は、ほとんどが「西洋医学」をバックボーンとしていたと思います。すなわち疾病とは「本来オーガナイズされた人体の機能の破たん」に由来し、それを是正すれば治るという理論です(ちょっと乱暴ですが)。大学の講義室の中では、西洋医学の知の蓄積ののっとり適切に問診・診察・検査をして、患者さんの不具合を客観的に洗い出し、それを解決することが治療である——というあらすじが、いつでも通用するかのように見えました。少なくとも素直な医学生であった私には。

私のようにナイーブでなくとも、臨床現場において、こうした枠組みが通用しない状況に遭遇し困ったことは、誰しもあるのではないのでしょうか。すなわち「診察上は異常ない」のに、患者さんは苦しみ続けている。効くはずの薬が無効な上に、薬を変えるたびにまれな副作用が次々出て、泥沼化。とにかく「何をやってもダメ」。

漢方なら「向き合いよう」がある

他科から「漢方でなんとかありませんか?」とコンサルトを受けるのはまさにそういう状況が多いんです

よね……というところから津田先生のこの本は始まります。西洋医学の枠組みでは「どうにもならない」と担当医を悩ませる状況に、漢方の文脈からならばアプローチできる(と思わせる)のは、なぜなのでしょう?

私たちの日常臨床の中にある、「治そう、良くしよう」という熱意が空回りする息苦しさをどうしたらいいのか? そのヒントが漢方(あるいは広義の東洋医学)の中にある、とこの本は教えてくれました。

簡単に言えば、西洋医学的な視点とは異なった何らかの「もう一つの科学的な視点」による複眼視によって、浮き出して見えてくる糸口がある。そして、もし糸口がないなら、「向き合いようがある」ということです。

二者択一から「複眼の思想」へ

繰り返しますが「漢方で一挙に解決!」といった華々しい話ではないのです。おそらくは同じことを、いろいろなたとえを使いながら著者は記述しています。その中で西洋医学と東洋医学を同じ平面に置いて、軽やかに行ったり来たりしています。どちらが良いとか悪いとかの二者択一ではなく。

察しの良い読者の方には、回りくどく冗長に感じる部分もあるかもしれません。ただ結論を急がずに読むと、じわり、と東洋医学の「考え方」が染み込んでくるように思います。「患者さんに振り回されちゃえば?」「再現性にこだわらなくていいんじゃない?」なんて視点を頭のどこかに持てたなら、自分に対して、またもしかすると患者さんに対しても、膠着状態の突破口になるかも……。そんな予感がします。